

古代史シリーズ5「日本の神社と神々」

第三部「八幡・宗像・住吉神社信仰と海神の神」



本冊子は、筆者が古代史セミナーを実施している中で、講義録を製本化したものです。

倭は大陸との交流、覇権争いの中で巧みに文化を取り入れ大和へ成長していきました。そこには海神（わだつみ）がいました。海神を祀る代表的神社、宇佐神宮、宗像大社、住吉大社の三社を探索します。大和に文明をもたらした海神と神社を訪ねる話です。

著者：有限会社 情報戦略モデル研究所

井上 正和

はじめに

本冊子は、筆者が古代史セミナーを実施している中で、講義録を製本化したものです。

筆者は、以前「メーカーのSDやコンサルタントが専門でした。十年ほど前から大学での講義をきっかけに古代の文化や歴史に興味が湧き、古代史のテキストを作り講義するようになりました。

元々、素人が古代史セミナーのテキストを作る訳ですから、古事記や日本書紀(以降は「記紀」という)が読めなかつたり、古代史は良く分からないと思われる初心者の方々が持たれる感覚が同様に疑問になりました。

当該古代史セミナーが以外に人気があるのは、素人の視点で不明点を解説することにあるのかもしれない。また、体系化されていて分かり易いとお褒めをいただきますが、元SDとしてシステム設計やプロジェクトマネジメントで体系化することが性癖になっていることが寄与しているのかもしれない。

古代史シリーズ5 「日本の神社と神々」の第三部「八幡・宗像・住吉神社信仰と海神の神」では、神功皇后の三韓征伐の後に生まれた応神天皇(八幡神)を祭祀し、日本最大の神社数を誇る「宇佐神宮」の創建の由来と八幡信仰の要因を捉えます。宗像大社では、高天原から降臨された宗像三女神を祭祀する海神の由来と信仰の要因をつかみま

す。住吉大社では、神宮皇后の三韓征伐を支えた海神、住吉大社の祭神の由来と信仰の要因を捉えます。本冊子は、記紀を読み解くために、参考図書を主体的に活用し記紀で裏付けをする形で進みます。図柄はウキ・ペディアからかなり引用しています。活用しました主要参考図書は次の通りです。

- 十「宇佐神宮」(宇佐神宮庁)
- 十「なぜ八幡神社が日本で一番多いのか」 島田裕巳著(幻冬舎)
- 十「Mansongaeのニッポン民俗学」小論 柳田国男著(2005.02.20)
- 十「宇佐神宮 神社紀行」(学研)
- 十「むなかたさま」(宗像大社社務所)、「宗像大社」(宗像大社社務所)
- 十「時空トラベラー 古代筑紫三海人続の謎(1)」 NTT Resonant INC
- 十「宗像大社」 神社紀行(学研)
- 十「住吉大社」 住吉大社編(学生社)

十「日本書紀」(宇治谷 孟著、講談社)
十一「古事記」(竹田恒泰著、学研)など
本冊子の古代史シリーズ5「日本の神社と神々」の第三部「八幡・宗像・住吉神社信仰と海神の神」の全体構成は次の目次にあけて置きます。

古代史シリーズ5 「神社と神々」

第三部「八幡・宗像・住吉神社信仰と海神の神」の目次

第一章 「宇佐神宮の構成と特徴」 宇佐神宮の境内構成の神々と神宮歴史を鳥瞰する。	5
第二章 「宇佐神宮の由来と広がり」 八幡神の縁起と八幡信仰の要因を掴みます。	17
第三章 「宗像大社の由来と信仰の広がり」 宗像大社の三女神の由来と宗像信仰の発展の由来を掴みます。	31
第四章 「住吉大社の構成と特徴」 住吉大社の境内構成の神々と住吉造の特徴を知る。	44
第五章 「住吉大社の由来と信仰の広がり」 住吉大神の由来と住吉信仰の広がり の要因を掴む。	55
おわりに	66

◆第一章 「宇佐神宮：概要と特徴」の目次

第一話 宇佐神宮の全体概要……………6

第二話 宇佐神宮構成……………8

第三話 宇佐神宮歴史年表……………13

コラム：「宗像三女神」……………16

参照資料 I-1: 宇佐神宮境内



宇佐神宮は八幡神社の総本山です。その宇佐神宮の境内概要から解説を始めます。

宇佐神宮の周りを寄藻川(よりもがわ)が流れ、神宮を囲んでいます。参道へ通じる橋が二つ、表参道に通じる神橋(しんきょう)と西参道に通じる呉橋(くればし)です。呉橋は呉の使者が来た時に呉人が作ったことから「呉」が付いた橋名になりました。

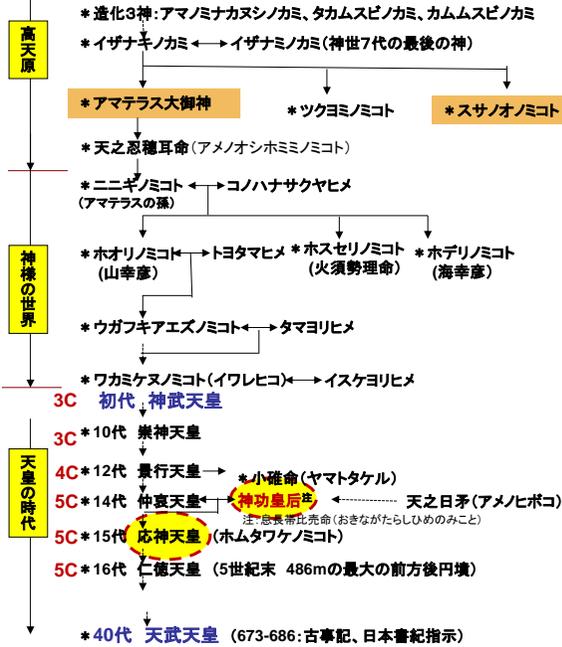
大鳥居を抜けて、表参道を進むと下宮(げぐう)があり、その奥に本殿の上宮(じょうぐう)があります。上宮の場所は小高い丘になっており小椋山(おぐらやま)と言われます。本殿はこの小椋山に築かれています。

この上宮には一之御殿(いちのごてん)、二之御殿、三之御殿があり、一之御殿には神龜二年(七二五年)に八幡大神が祭られました。この八幡神が顕現した菱形池(ひしがたいけ)が境内の中央にあり、八幡神の顕現は五七一年と社伝は伝えています。

八幡信仰の神社位置づけを抑えていきましょう。八幡神社としては、京都の石清水八幡宮、鎌倉の鶴岡八幡宮、博多の菅崎宮、大分の宇佐神宮が著名である。石清水八幡宮は八五九年に宇佐八幡宮から注勸請(かんじょう)され、鎌倉の鶴岡八幡宮は源頼義が前九年の役に勝利後、石清水八幡宮を鎌倉の由井に勧請し、源頼朝が鎌倉に幕府を開いた時、由井から現在の地に移され鶴岡八幡宮となりました。(注勸請

とは、神仏の分霊を請(しよう)じ迎えること。
 博多の宮崎宮は勧請されたものではなく、九二四年に八幡神が海外からの侵略を防ぐために、八幡宮の造立を直接宣託したことで建立された神社である。

参照資料 I - 2: 神と天皇系譜



八幡信仰に関わる神社は、神社庁管轄の七万九三三五社(平成二年調査)の中で最大の信仰を誇り、七八一七社に上る。八幡神を祀る神社は、八幡神社、八幡宮、若宮神社などと呼ばれる。宇佐神宮での参拝形式は二礼四拍手一拝が古儀である。出雲大社の礼拝形式と同じである。遷宮は、鎌倉末期まで二十三年毎の式年造宮であつたが、臨時造宮に変更されている。臨時造宮とは火災や異常時に行う遷宮であり、仮殿を設置するので仮殿遷宮ともいわれる。延喜式によれば、祭神は応神天皇(誉田別命: ホンダワケノミコト)、比売大神(ヒメオオカミ)、神功皇后(ジングウコウゴウ)である。天皇の系譜から応神天皇と神功皇后を見ると、十五代応神天皇は十四代仲哀天皇と神功皇后の御子になる。母親と共に祀られていることになる。

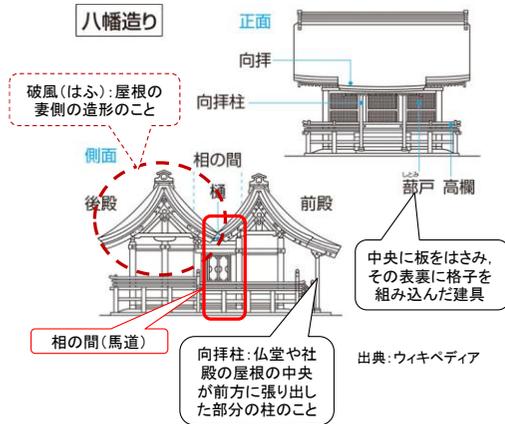
一之御殿の御祭神である比売大神は八幡様が現われる以前の古い神、地主神として祀られ崇敬されてきました。

神代(かみよ)に比売大神が注宇佐嶋(うさしま)にご降臨され(たぎ)んになったといわれます。「八幡様」の愛称で知られます。

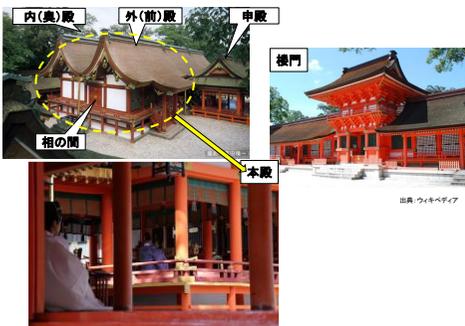
宇佐の地は畿内や出雲と同様に早くから開けたところで、神代(かみよ)に比売大神が注宇佐嶋(うさしま)にご降臨されたと『日本書紀』に記されている。(注)宇佐嶋は宇佐洲(宇佐国御許山: おもとやま)と考えられている。

比売大神は、宗像三女神といわれる多岐津姫命(タギツヒメノミコト)、市杵嶋姫命(イチキシマヒメノミコト)、多紀理姫命(タギリヒメノミコト)とされる。八幡神が祀られた六年後の七三一年(天平三年)に八幡神の神託(お告げ)により一之御

参照資料 I - 3: 建築様式(八幡造)



参照資料 I - 4: 宇佐神宮(八幡造)



殿が造立され、宇佐の国造は、比売大神をお祀りした。(宗像三女神の詳細はコラムを参照ください。)三之御殿は神託により、八二三年(弘仁十四年)に建立され、応神天皇の御母、神功皇后をお祀りしている。現在、神功皇后は母神として神人(じにん)交歓、安産、教育等を守護する神として威徳を示している。神人交歓とは神職による舞や唱(とな)えによる神とのやり取りをいい、威徳とは犯しがたい威と人に尊敬される徳のことをいう。

第二話 宇佐神宮構成

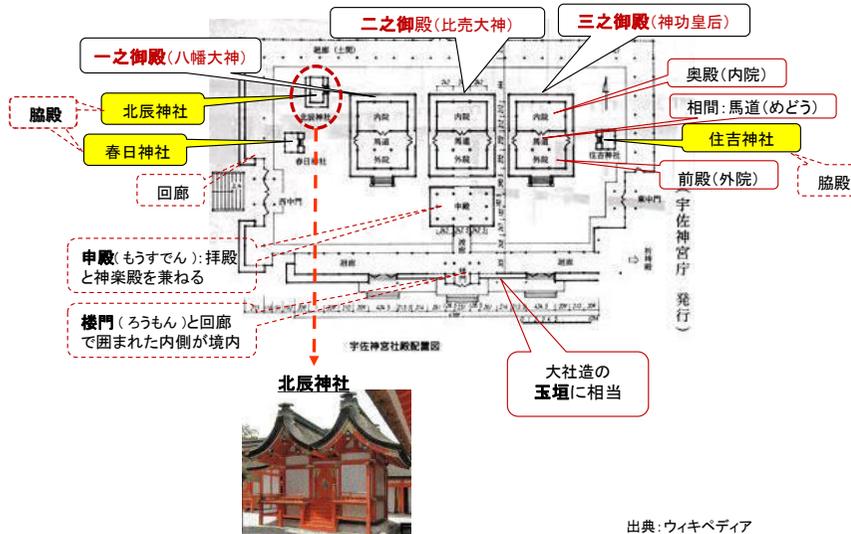
神宮構成は伊勢神宮に倣い上宮(じょうぐう)と外宮(げぐう)から成る。出雲大社という玉垣内(たまがき)に祭神と脇殿が鎮座する。宇佐神宮独特の様式を持つ上宮の本殿の建築様式から見えていきます(参照資料 I-3,4)。

宇佐神宮の建築様式は八幡造(はちまんづくり)と言われる。この八幡造は、二棟の切妻造平入(きりづまづくり)ひらいりの建物が前後に接続した形で、両殿の間に一間の相の間(馬道:めどう)がつき、その上の両軒に接するところに大きな

金の雨樋(あまどい)が渡される特異な構造を持つ。屋根は注(す)松皮葺(ひはだぶき)で白壁朱漆塗柱の華麗な建物が、横(よこ)一列に並ぶ。

(注)檜(ひのき)の皮を剥いで敷き詰めます。日本にしかない葺き方で、優美で洗練された印象を与えます。屋根は流造(ながれづくり)で平入の正面に伸びているため、仏堂や社殿の屋根の中央が前方に張り出した部分に向拝柱(まはば)は

参照資料 I - 5 : 宇佐神宮上宮本殿と脇殿



しらがあり支えている。平入の正面の戸は、現在のシャッターに相当する葺戸(しきみど)がある。葺戸は中央に板をはきみ、その表裏に格子を組み込み、寝殿造りなどに用いられた建具である。

本殿の構成は、楼門(ろうもん)、申殿(さると)の、拝殿(こと)、本殿、脇殿(わきどの)から成る。本殿は奥殿を「内院(ないいん)」、前殿を「外院(げいん)」といい、内院には御帳台(みちょうだい)があり、外院には御椅子が置かれ、いずれも御神座である。御帳台は神様の夜のご座所であり、御椅子は昼のご座所と考えられている。神様が昼は前殿(外院)、夜は奥殿(内院)に移動することが八幡造の特徴と言える(参照資料 I-6)。

玉垣内の本殿祭神のそれぞれには脇殿が設けられている。脇殿とは正殿に控える神の日常の世話をする神を言う。

出典: ウィキペディア

一之御殿は、祭神が応神天皇、別称は菅田別命(ホンダワケノミコト)であり、脇殿には春日神社を配置する。春日神社は藤原氏の祖神である天兒屋根命(アマノコヤネノミコト)が祭神である。この脇殿の由来は「磯の童(いそのわらべ)」が神功皇后三韓出兵の際に、龍宮から潮の満ち干を操る靈力を持つ潮盈珠(しおみつたま)と潮乾珠(しおふるたま)、この神器を借り受けて皇后に献上し、そのおかげで皇后は三韓出兵に成功したのを助けたことによる。「磯の童」とは筑前では志賀島(しかのしま)を中心として活躍した海神、阿曇氏の祖神である志賀島明神、阿雲磯良(あずみいそら)を指します。天兒屋根命は、阿雲磯良と同神であると社伝はいう。この神器は日本神話の海幸山幸神話にも登場する。

二之御殿は、祭神が比売(ヒメ)大神であり、脇殿には北辰神社を配する。北辰神社はこの上宮の地に八幡神が鎮座するより前から祀られていた地主神と社殿は伝える。祭神は天御中主神(アメノミナカヌシノカミ)、高御産巢日神(タカムスビノカミ)、神産巢日神(カ

ミムスビノカミ)で造化(ぞうか)三神の三柱である。二之殿の脇殿で西中門内に鎮座する。八幡造の基となったのは、二之御殿の脇殿である北辰神社の建物ではないかといわれている。

三之御殿は、祭神を神功(ジングウ)皇后とし、脇殿には住吉神社を配する。脇殿の由来は、住吉神社が住吉大神を祭神とし、神功皇后は住吉大神の神託もあつて新羅征討が成功したとすることによる。

下宮(げぐう)の創建は嵯峨天皇の弘仁年間(八一〇年代)に勅願(ちよくがん)によつて創建され、上宮の御分神を「鎮祭になったことがきっかけで、八幡大神・比売大神・神功皇后は上下御両宮のご鎮座となる。以降、「下宮参りにや片参り」と云われる。神道では、「一処二祭場」という神社形式がある。同じ場所あるいはすこし離れた場所に同じような社が二ヶ所祀られていることを指す。これら二つの神殿(祭場)は生と死・聖と俗・男と女・天と地などを表し、二神殿をもつことでそこでの祭祀(さいし)が完成するという。伊勢神宮、諏訪神宮、上賀茂・下鴨などはこの形式をとっている。下宮の八幡大神は、御饌(みけ)を司るとともに、農業や一般産業の発展、充実をお守りになるご神威を発揮するということから、国家鎮護神である上宮に対して御饌(食事)など世俗的なものを掌る神として祀られたといえる。聖と俗の関係である。古くから日常の祭祀には、とくに国民一般の祈願や報賽(ほうさい)が行われてきた。報賽とは祈願が成就したお礼に神仏に参拝するお礼参りのことである。下宮の建築様式は上宮と較べ小さいながらも同じ八幡造になる。

境内内の撰社・末社は参照資料「1」にあるように撰社八社、末社十二の神社があります。脇殿と撰社について概説しておきます。

まず、祭神の日常の世話をする脇殿の神社から見てみましょう。一之御殿(八幡大神)の脇殿は春日神社、二之御殿(比売大神)は北辰神社、三之御殿(神功皇后)は住吉大社です。

春日神社は、末社であり天児屋根命(アメノコヤネノミコト)が祭神。天児屋根命は藤原氏の祖神と言われます。天孫降臨の随伴神の一柱であり阿曇磯良(あずみいそら)と同神と言われている。一之御殿の脇殿です。阿曇磯良とは神功皇后を三韓征伐で助けた由来で、阿曇磯良といわれ、阿曇氏の祖神とする海神(ワタツミ)である。筑前では志賀島明神であり、大和では春日大明神(春日神)でもあります。

北辰神社は、末社であり、祭神は造化三神(ゾウカサンシン)である天之御中主神(アメノミナカヌシノカミ)、高御産巢日神(タカミムスビノカミ)、神産巢日神(カミムスビノカミ)とするが、これらの神を上宮の地主神と捉えている。二之御殿の脇殿で西中門内に鎮座する。二之殿祭神の比売大神は宗像三女神で天照大御神の子神になる。宇佐で最も古い地元神であり、社は宇佐神宮の原型と言われる。

参照資料 I - 6 : 宇佐神宮境内の摂社・末社

注: 宇佐神宮の主祭神にはすべて脇殿がある。

摂・末社	神社名	事項
摂社	若宮神社	天長元年(824)、ご神託によって大鷦鷯尊(おおさざきのみこと、仁徳天皇)を祀る。
摂社	春宮(とうぐう)神社	祭神 菟道稚郎子命(うじのわきのいらつこのみこと)。応神天皇の御子神で仁徳天皇に皇太子を譲った弟神。
摂社	住吉神社	住吉大神が祭神。三之殿の 脇殿 。
摂社	宇佐祖(うさそ)神社(頓宮)	御祭神 菟狭津彦 菟狭津媛。神武天皇を一柱騰宮(あしひとつあがりのみや)で大御饗(おおみあえ)した国つ神。宇佐の国造、大宮司の祖神。
摂社	黒男(くろお)神社	武内宿禰が祭神。景行天皇より5代の天皇に仕えた功臣。特に応神天皇に厚い。
摂社	大尾(おお)神社	大尾山頂にあり、和氣清麻呂が道鏡事件に際して、国体護持の御神教を授かった。当時(769年)、八幡大神は厭魅(えんみ)事件に関与し、大尾山にあった。
摂社	大神祖(おおがそ)神社	御祭神は八幡大神を顕した大神比義翁の霊を祀る。
摂社	大元(おおもと)神社	宇佐神宮の奥宮とされ、比売大神(ひめおおかみ)の降臨の地とされている。
末社	護王(ごおう)神社	御祭神は和氣清麻呂朝臣命。御神教を受けた大尾(おお)山の山腹に祀る。
末社	八坂神社	須佐之男命を祀る。この神社の前で、毎年二月十三日に鎮疫祭(ちんえきさい)が行われる。
末社	木匠祖(もくしょうそ)神社	宮大工・寺大工・椽皮師・塗師の職人達と、近郷近住の職人の守護神。
末社	北辰神社	造化三神を祀る。上宮の地主神でもある。二之殿の 脇殿 で西中門内に鎮座。
末社	春日神社	天兒屋根命が祭神。一之殿の 脇殿 。磯の童が神功皇后を助けた由来で、この童は筑前では志賀島明神、大和では春日大明神。 安曇磯良(あずみいそら) : 志賀島明神(天兒屋根命)
末社	誓約の5柱+3柱 八子(やご)神社	八幡大神の八王子神を祀る。玉垣内の神木、楠に鎮まり座す。
末社	亀山神社	大山積命が祭神。上宮の鎮座する小椋山は亀山ともいい、亀山の守護神。
末社	椎宮(しいのみや)神社	神武東征時、海の案内をした椎根津彦命を祀る。
その他末社	平野神社、善神王(ぜんじんおう)神社、水分(みくまり)神社、百体(ひゃくたい)神社	

出典: 宇佐神宮(宇佐神宮庁出版)

住吉神社は、摂社であり住吉大神が祭神である。住吉大神とは黄泉国(よみのくに)から戻ってきた伊邪那岐命が穢れを洗い清めた時に成った神で、「底筒男命(ソコツツオノミコト)」、「中(チカ)筒男命」、「表(ウラ)筒男命」である。神功皇后の三韓征伐で功績をあげ、大阪住吉の地に祭祀された。対馬海峡渡航の港である対馬の南橋にある豆殿(つ)に居た海神ではと言われる。三之御殿(神功皇后)の脇殿である。

社殿をみると、一之御殿、二之御殿は神功皇后に係する神であり、二之御殿は天照大神の子神の宗像三女神である。大和朝廷の祖神をもつ大和朝廷色の強い神社と言える。

その他の境内内摂社・末社を概説しよう。まず摂社からです。

若宮神社は、主祭神の後継を祀る社で天長元年(八二四年)、ご神託によって大鷦鷯尊(オオサザキノミコト)、すなわち十六代仁徳天皇を祀る。

春宮(とうぐう)神社は、祭神が菟道稚郎子命(ウジノワキノイラルコノミコト)。応神天皇の御子神で仁徳天皇に皇太子を譲った弟神を祭る。

宇佐祖(うさそ)神社(頓宮)は、御祭神が菟狭津彦 菟狭津媛。神武天皇を一柱騰宮(あしひとつあがりのみや)で大御饗(おおみあえ)した国つ神で、宇佐の国造であり、大宮司の祖神です。頓宮(とんぐう)とは神の巡幸時の御旅所で仮宮や休憩処をいう。

黒男(くろお)神社は、武内宿禰(たけうちのみくね)が祭神である。景行天皇より五代の天皇に仕えた功臣である。三韓征伐で神宮皇后に随伴し、皇后の子の応神天皇に厚い。

大尾(おお)神社は、大尾山頂にあり、和氣清麻呂が道鏡事件に際して、国体護持の御神教を授かった神社である。当時(七六九年)、八幡大神は注厭魅(えんみ)事件に關与し、大尾山にあった。(注)統日本紀には「人を呪い殺そうとする呪法を行つた」とある。これにより大仏造立時の立役者大神社女・大神田麻呂は流罪となり、大神氏一族は宇佐八幡宮から退去している。

大神祖(おおがそ)神社は、御祭神は菱形池に八幡大神を顕した大神比義(おおがのひぎ)翁の靈を祀る。

大元(おおもと)神社は、宇佐神宮の奥宮とされ、比売大神(ヒメオオカミ)の降臨の地とされている。八幡大神の託宣によつて小椋山(現在の本殿地)に遷座される。

次に末社を見てみましょう。

護王(ごおう)神社は、御祭神は和氣清麻呂朝臣命。御神教を受けた大尾(おお)山の山腹に祀る。

八坂神社は、須佐之男命を御祭神として祀る。この神社の前で、毎年二月十三日に鎮疫祭(ちんえきさい)が行われる。京の繪本山の八坂神社では葵祭の鉾の山車で疫病を鎮撫する。

木匠祖(もくしょうそ)神社は、宮大工・寺大工・桧皮師・塗師の職人達と、近郷近住の職人の守護神である。

八子(やこ)神社は、八幡大神の八王子神を祀る。玉垣内の神木、楠に鎮まり座す。八王子神は天照大御神と素戔嗚命の誓約で成つた男神五柱と女神三柱と言われる。

亀山神社は、大山積命が御祭神。上宮の鎮座する小椋山は亀山ともいい、亀山の守護神である。

椎宮(しいのみや)神社は、神武東征時、海の案内をした椎根津彦命を祀る。

平野神社は、摂社住吉神社の相殿にお祀りし、神功皇后のご由縁のあるご祭神である。

善神王(ぜんじんおう)神社は、高良大神・阿蘇大神を祭神とし、上宮、南中楼門に祭る。御門の神として勅使門を守護される。

水分(みくまり)神社は、御祭神は水分五神、高禰神(タカオカミノカミ)、天水分神(アメノミクマリノカミ)、国水分神(クニノミクマリノカミ)、天汲匏持神(アメノクヒザモチノカミ)、国汲匏持神(クニノクヒザモチノカミ)を祭る。水を司る神である。

百体(ひやくたい)神社は、御祭神を隼人の靈とする。八幡大神が隼人征伐に行幸され、御帰還時百個の首を持ち換えられた。隼人の靈を慰めるために創祀した。

第三話 宇佐神宮歴史年表

参照資料 I - 7: 宇佐神宮歴史年表(その1)

西暦	和暦	事項
	上代	市杵嶋姫命・湍津姫命・田霧姫命の 三女神 、 宇佐嶋 に天降る。
	神武天皇即位前期	神武天皇東征の折、 菟狭津彦・菟狭津媛 、 菟狭川 の川上に一柱騰宮を造営する。
	応神天皇1	応神天皇即位 あしひとつあがりのみや
	十雄略天皇御代	雄略天皇病氣により、豊国の奇巫(ふげき)召し上げられる。
531	継体天皇25	北魏善正、 彦山(英彦山)を開く 。 ほくぎのぜんしよう
→ 571	欽明天皇32	八幡神 顕現し、大神比義が祀る。
587	十用明天皇2	用明天皇病により、豊国法師が内裏に参内する。
703	大宝3	医術により僧法蓮に田40町を賜う。 宇佐の辛島郷に
→ 712	和銅5	廣居社を造り、八幡大神を祀る 。
720	養老4	豊前国守宇努首男人、將軍として八幡神を奉じ、 大隅・日向の隼人を攻め、後放生会を開始
721	十養老5	医術により僧法蓮の家族に、 宇佐君姓 を賜う。
→ 725	神亀2	小椋山(現在の本殿地)に八幡大神一之御殿を遷座 する。また、東方の日足に弥勒禅院を建立する。
→ 731	天平3	八幡宇佐宮、 宣幣に預かる 。
→ 733	天平5	天平3年の 託宣 により、 二之御殿に比売大神鎮座 する。

出典: 宇佐神宮社史(宇佐神宮庁出版)

宇佐神宮の初期の註霊験は帝の病氣治癒に向けた法医にあつたといえる。(注)霊験とは、神仏が示す不思議な力を言う。

八幡神の顕現が当神宮の隆盛を確立する。八幡神とは十五代応神天皇(五世紀)を指す。

宇佐神宮の朝廷からの信認は医術による朝廷への貢献から始まる。社伝では、二十一代雄略天皇の病氣により、豊国の註巫覡(ふげき)が召し上げられる。(注)神を祀り神に仕え、神意を世俗の人々に伝えることを役割とする人々を指す。女性は「巫」、男性の場合は「覡」、「祝(ほうり)」と云った。さらに書記には三十一代用明天皇の病により、豊国法師が内裏に参内する。そして、養老五年、医術により僧法蓮の家族に「宇佐君」の姓を賜う。

宇佐神宮社伝を紐解くと、地元神の八幡神が国家神へ変換していく過程が良く理解できる。宇佐神宮の歴史は四つの視点を持つてみることでその経緯が読み取れる。その四つの視点とは、「宇佐への三女神の降臨」、「医術による朝廷への貢献(参照資料和暦の「十一」印参照)」、「八幡神の顕現(⇒「十一」印参照)」、「八幡神の神託(和暦の「*」印を参照)の視点である。

宇佐神宮社史によれば、宇佐神宮は宗像三女神である市杵嶋姫命・湍津姫命(タギツヒメノミコト)・田霧姫命が宇佐嶋、御許山(おもとやま)に天降ることから始まる。記紀にも天照大神の命により高天原から降臨したことを伝えている。また、初代の天皇である神武天皇の東征時に、菟狭津彦(うさつひこ)・菟狭津媛により大御饗(おおみあえ)を受け歓待された一柱騰宮(あしひとつあがりのみや)の造営が記される。この遺跡は現在も宇佐神宮境内に残り、記紀にも記載されている。記紀に載る伝承が神宮創建の始点になっている。

参照資料 I - 7: 宇佐神宮歴史年表(その2)

西暦	和暦	事項
743	*天 平 15	聖武天皇、大仏を造る事を発願する。三重塔建立(東塔)
746	十天 平 18	聖武天皇不豫(ふよ)の祈禱に驗あり、八幡大神に三位を与える。封戸400戸、僧50口等寄進される。
749	*天 平 21	聖武天皇、東大寺建立のため八幡宮に祈り、 神託により黄金出土する。
752	天平勝宝4	東大寺大仏開眼する。陸奥の金、長門の銅
769	*神護景雲3	八幡神の教えとして道鏡の天位 託宣あり 、和氣清麻呂宇佐八幡に詣で、道鏡の野望をくじく。
→ 780	宝 亀 11	小椋山に八幡宮造営。
→ 781	天応1	八幡大神に、 護国靈驗威力神通大菩薩 の尊号を上げる。
814	弘 仁 5	最澄、渡唐を願い、八幡大神、香春神に法華経を講ずる。
821	弘 仁 12	大神・宇佐二氏を宇佐宮宮司 に任ずる。
→ 823	弘 仁 14	八幡宮に神功皇后(三之御殿)を祀る。 空海、八幡神を東寺に勧請する。
810 ~ 824	弘仁年中	下宮を造立す。
855	齊 衡 2	東大寺完成を宇佐八幡宮に報告する。

出典: 宇佐神宮社史(宇佐神宮庁出版)

宇佐神宮託宣集によれば、十九代欽明天皇期に菱形池のほとりに、神光(しんこう)が輝き数々の不思議が起る。欽明三十二年(五七一年)二月初卯の日に八幡神の託宣があり、「われは菅田天皇八幡八幡麻呂(ホンダスマラミコトヒトハタノヤハタマロ)なり。我名をば護国靈驗威力神通自在王菩薩(ミコクレイげんりよくじんつうだいぼさつ)と申す」と告げられたので、神異(しんい: 神の威光)の翁、大神比義(おおがひぎ)が祀つたというのが八幡大神の最初の御顕現である。

七二二年、鷹居社(たかいしや)を造り祀り、七二五年に勅命により小椋山の八幡大神一之御殿に遷座する。その後、二之御殿(七三三)、三之御殿(八二三)も八幡神の託宣によって、勅命で造営される。そして、八一〇年、外宮を造立し、宇佐神宮は「二処二祭場」という神社形式になり、二神殿を持つことでその祭祀を完成させた。宇佐神宮は朝廷との結びつきが強く、八幡神の顕現からすべて託宣によって創り上げられていることから朝廷の加護により発展したことが良く表れている。

宇佐神宮の靈験を確定的なものにする「八幡神の神託」がある。一つは聖武天皇期の東大寺大仏の建立時に、大仏装飾の金箔が不足した時に、天平二十年「必ず国内より黄金を出す」神託があり、神託通りに陸奥国の小田郡に金が出土し、長門国の銅山が発見され発掘される。神託が見事に当たったのである。

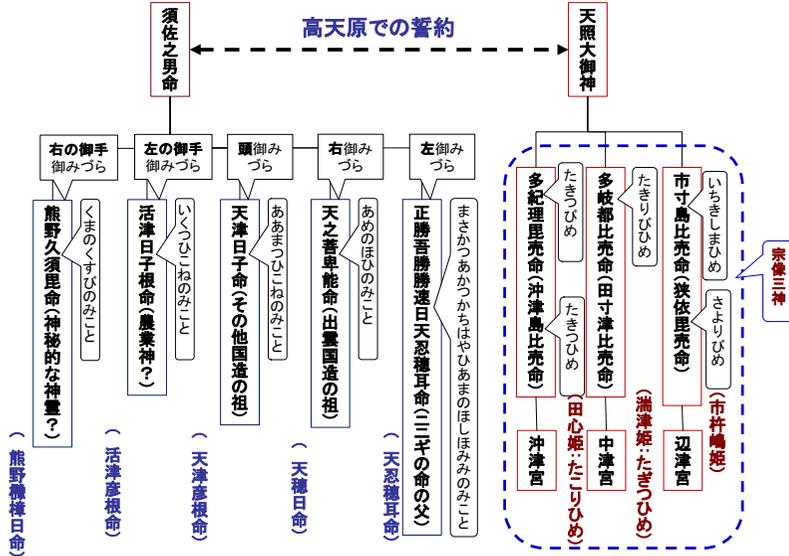
もう一つは和氣清麻呂への神託である。称徳天皇期の道鏡事件である。七六九年、太宰主神中臣習宣阿蘇麻呂(だざいのかんずかさなかとみすげのあそまろ)が「道鏡を皇位に即けしめば天下太平ならん」の神託があつたと奏上する。その真意を確かめるためにその七月、和氣清麻呂が宇佐神宮に遣わされる。太尾山頂の神前で女禰宜辛島与曾米(めねぎからし

まよそめ)の取次で「無道の者はよろしく早く掃除(そうじよ)すべし」との神託を受け、七月二十一日朝廷へ奏上する。無道の者とは、天皇の血筋の後継者ではない者という意味である。宇佐神宮は七八一年に八幡大神に、「護国靈験威力神通大菩薩」の尊号を奉り、簡略名の「八幡大菩薩」として、神仏習合を具現化した国家の守護神になった。

道教事件の神託には大神氏と辛島氏の巫女が出てくる。宇佐神宮には八幡神の顕現で朝廷から遣わされた官司の大神氏と地主神として八幡神を祭祀していた土着の辛島氏との間に権力争いが発生するが、次第に大神氏が主導権を取り、朝廷の神社として変貌していく。詳細は後述する。

参照資料 I-8 : 誓約により成った神(書紀記述ベース)

注: 神名は古事記、()内は書紀での表記名



宇佐神宮の二之御殿に鎮座する比売大神は八幡大神が顕れる以前の古い神で、宇佐島に降臨した地主神と言われる。宇佐島とは宇佐洲、宇佐国御許山(おもとやま)と考えられている。御許山とは宇佐神宮の南に立つ標高六四七メートルの神体山で、その九合目に宇佐神宮の元宮とする大元(おもと)神社があり、依代(よりしろ)として降臨したとされる三つの巨石を祭ります。八幡神の神託で二之御殿に鎮座する。この三つの巨石は宗像三神の依り代と言われる。

日本書紀によれば、宗像三神は天照大御神と須佐之男命との誓約(うけい)によって成った神と言われる。高天原から追放される前に訪れた天照大神に高天原を奪いに来たという疑いをもたれる。その疑いを晴らすために、そういう邪心がないことを天照大御神に示す誓約をされます。この誓約の中で須佐之男命から成った男神五柱、天照大御神から成った女神三柱。女神三柱が宗像三女神で多岐津姫命(タキツヒメノミコト)、市杵嶋姫命(イチキシマヒメノミコト)、多紀理理姫命(タギリヒメノミコト)である。この誓約の後、

天照大御神の神勅、「汝三神(イマシミ、シラノカミ)、宜しく道中(みちのなか)に降居(くだりま)して、天孫(あめのみま)を助け奉り、天孫に祭(いづ)かれよ。」と。翻訳すると、「お前たち三柱の神よ、海路の途中に降り居て、天孫を助けまつり、天孫のために祀りをされよ」を受けて高天原から筑紫の国に降臨される。

御許山への降臨はこの書紀の記述に符合するとされている。

コラム:「宗像三女神」

